高校訪問実施の記録

―2007年３月～2014年10月―

小 松 原　　尚

はじめに

2018年度においてわれわれは、「交流人口の拡大と地域創生の課題と展望」をテーマに共同研究に取組んでいる（代表者：下山朗・教授）。この研究にあっては、学生の就学行動による交流人口が地域における雇用と定住人口の拡大（地域創生）につながるか否かの可能性に関して検討することもその目的の一つになっている。

学生の就学行動においては、高校の進路担当教員の役割は大きい。そこで、本学の入試、広報活動の一環として実施をみた高校訪問において進路指導教員と交わされた会話の内容をいくつかの観点を示しながら整理してみた。

高校生の進学行動の要素を一教師の側面から継続的に観察した記録資料である。尚、記述内容は調査当時のものであり、現在とは異なる場合もある。

１　国公立志向

(1)【2007年３月、小松原の所感】北海道内の受験生の動向は道内各地域の基幹と位置づけられるような国公立大学への希望が多い。ただしこの点は本学（奈良県立大学）への志願可能性を否定するものではない。北海道の場合、北大を前期で志願し、中期は滑り止めとして、理系の場合、大阪府立の工学部を受験するケースがある。この点を踏まえると、文系の場合、本学の中期を選択肢の一つとして取上げられることも可能であろう。道内では釧路公立との競合はあるが、本学との差別化の見通しはあると思われる。

(2)【2009年７月】高校に生徒を通わせる父母は「大学こそ国公立で」とい

う希望が強い。「国公立」に何人合格させるかが高校の評価につながる。いわゆる有名私大の指定校推薦もあるが、たいてい推薦枠を余らせている。

(3)【2010年９月】京阪神圏での進学傾向が強く、国公立、私立を問わず地域の期待に応えるような進学実績を実現している。奈良の場合、女子大へは進学しているが、県立大はほとんど関心が払われていない。

(4)【2011年９月】高校が私学なので、父母、生徒とも大学は国公立への、関心が高い。

(5)【2011年９月】「地域」を学部名あるいはその一部にする国公立大学があるが、奈良県立大学の特徴は何か。

(6)【2014年９月】大学入試の次は、４年後の就職をめざすということで、特に、公務員志望の生徒には、公立大学は行政との関連が強いように思え、勧め易い。また、地域経済は就職の準備勉強につながるイメージがあるので、その意味からもふさわしいと思う。高校では、ほぼ全員がセンター入試を受験している。

２　受験指導

(7)【2007年３月、小松原の所感】国公立大学合格者を増やそうとする高校の受験指導はセンター試験に向けて、５教科型を貫くように進路指導しているとのことである。また、生徒を受験させる場合、採用科目数が少ないために危険分散ができにくく、かえって負担感が増すので、国公立志望の生徒の場合、アラカルト型の大学には慎重にならざるを得ないとのことであった。

(8)【2009年７月】２次試験の出題は概ね妥当である。センターのリサーチの結果で受験校に決められる大学である。合格者の中にはリサーチの合格圏よりかなり低い生徒もいるのではないか。２次試験の出題と採点を信頼しているが、全問記述式の大量の答案を、限られた時間と少人数の先生方でどのように採点されているのか。

(9)【2009年８月】センターと２次試験で国公立大学へ合格するように進学指導している。そのことが学校（高校）に対する生徒・父母の信頼感や評価の向上にもつながっている。

(10)【2009年８月】奈県大の小論文の問題は問題文の選定も、設問も高校生段階のレベルを考慮された内容になっていると思う。出典を買い整え、生徒の読書指導にも役立てている。

(11)【2009年８月】卒業生から進学先の大学の体験談を在校生に話してもらう機会をもうけている。大学では学生の母校訪問に関して何か指導をしているか。

(12)【2010年８月】受験生は受験科目数の少ない方を好む。

(13)【2010年８月】入試問題の形式は現状で良いと思う。受けたい大学が必ずしも受験できるとは限らず、生徒には受験科目を安易に絞りこまないように指導している。従って、生徒指導上、必要科目数は多い方が良い。また、大学に入ってから生きてくる科目がたくさんある。そのことも生徒に伝えたい。３年前半に第一志望校を決めさせる。

(14)【2010年８月】生徒の受験校選定の基準は受験の利便性ではなく大学の魅力である。受験科目の多寡については、受験行動には直接反映しない。要はどの大学を受験するかであり、科目数が少ない大学を受験する訳ではない。

(15)【2010年９月】試験会場に関しては、生徒の受験行動には影響はないと考えられる。生徒は自分の学びたい学問分野とセンター試験の成績を勘案しながら志望校を決めている。ただし、大学の学修内容まで立入って考えている訳ではなく、学部名で判断しているようである。その点では、奈良県立の場合、何になる学部なのかという点がわかりにくい。公立大学の中で科目数の少ない大学の中で、京都府立とか神戸市外大のようにセンターの数学を必要としない大学への関心は少しはあるが、進学行動全体への影響はほとんどない。生徒には、幅広く科目を勉強するように勧めている。

(16)【2011年９月】募集要項の確認、センター試験の採用科目について、出題様式は例年通りか、高校の方で、各大学の要項の比較検討をしている。

(17)【2011年９月】大学はどこに進学するとしても自宅からは通えないので、進学先は広角で考えている。系列の大への推薦があるので、希望者は進学可能である。校外学習に際の訪問地に県立大学も加え、授業も実際に受けさせたい。

(18)【2011年９月】生徒に調べ学習を指導する上での、教師への助言をお願いしたい。
(19)【2011年９月】全校で3,000人（内、高校生は1,800人）の生徒がおり、学力レベルも進路選択も多様である。高校は１学年600人で内、中学からの進学者が400人である。それに対応可能な指導態勢をとっている。土曜日も授業、オープンキャンパスなどに参加で欠席する場合は学校の承諾必要である。出身学生の大学での学修状況について知りたい。
(20)【2011年９月】センター出願書類準備段階、受験種別や、学校選定はこれからである。センター試験の準備と推薦入試の準備の両方は難しい。２学期制なので、月末に期末試験が予定されている。大学見学での授業体験も考えたい。
(21)【2011年９月】推薦入試の小論問題の出題傾向と対策、高校生の現状認識の幅が狭いので、出題意図を汲んで文章を作成する指導に苦慮している。国語と社会系の教員で対応している。推薦、一般とも受験希望者がいる。
(22)【2012年９月】資格課程の有無は大学選びの基準にはならいない。大学か専門学校かの進路判断の基準にはなるかもしれない。学問したい生徒が大学へ行けばよい。
(23)【2012年９月】生徒の気質として、与えられた課題はこなすが、自分でそれを発展的に進める力は乏しい。
(24)【2012年９月】センター試験対策など、大学受験準備のため十分な時間を割けなくなった。
(25)【2012年９月】大学選びに際し、単に偏差値のみで決めるのではなく、大学の教育研究内容を実体験を踏まえつつ、生徒自らが選択するようになることを目的に、「研究室訪問」という校外学習活動（フィールドワーク）を実施している。高校で協力可能な大学を設定し、事前に大学教授と生徒自身が連絡をとり、実際に研究室を訪問し、大学の学問や研究の様子を実際に教授自身から伺うものである。訪問前に教授から課題が出されることもある。それらの内容を生徒が報告書にまとめあげる。その後、パワーポイントを使用してプレゼンテーション大会を実施する。そして、最後にそれらを踏まえ

て、ポスターセッションを開催している。その際には、訪問先の教授をお招きして、講評をしてもらっている。今後、全面的に実施するには、20校ほど協力大学を増やさなければならない。奈県大は大阪府外ではあるが、本校との交通アクセスは恵まれているので、その際には協力をお願いしたい。

(26)【2013年９月】大学選びに際し、単に偏差値の高い有名大学に決めるのではなく、大学の教育研究内容をオープンキャンパスなどで実体験しつつ、生徒自らが選択するようになることが大切である。いわゆる国公立や名門私大合格者数を競い、学校の名声につなげることはよしとはしない。玄関に大学名や合格者数などを掲示することもしていない。そうした学校の行為は、適切とは考えにくい。良い大学・学校というのは先生と学生・生徒が楽しく学べる環境があるかどうかが基本だと考えている。その点を見極めつつ、生徒の進路決定を後押しするのが教師の役割と思っている。奈良県立大学は「全体として少人数」（小規模）な大学の利点が活かされた教育実践がなされているように思われる。さらに、これからコモンズ制（※小松原の注記：2014年度より実施した）になれば、教員の専門性を加味しつつ組織的に学生への指導がなされるとのことだから、学生への目配りの利いた小規模大学ならではの教育実践を期待している。生徒の関心もみながらこうした大学に向いていると思われる生徒には、奈良県立大学の情報提供をしたい。「少人数教育で、地域をフィールドに」というのは、規模の大小を問わずどこの大学でもやっているので、セールスポイントにはなりにくいと思う。ただ、小規模大学で、チームティーチングによる系統的指導体制をとるということであれば、高校の進路指導担当としては応援したい気持ちである。

(27)【2013年９月】普通科の高校なので野外活動はやっていない。生徒の安全上の問題もある。大学で野外活動も重視した教育課程がつくられるのであれば、興味のある学生に勧めたい。県立大学は小規模大学なので、コモンズ制になれば、一層、学生への指導もきめ細かい指導がされると思われる。何になるかを考えての大学選択であれば、文系は法、経、商など、理系だと工学部になる。ただ、高校卒業時と大学卒業時とは考え方も変化するので、何になるか考えるための大学進学もあると思う。そういう生徒にはこの学部は

適していると思う。
(28)【2013年９月】高校では、体育の授業も重視し、一般の高校よりも時間数が多くなっている。その意味では「フィールド」を重視している。理系志望の生徒が多くを占めている。経済・社会環境が不安定であるので、この傾向は続くと考えられる。したがって、本校から県立大学への進学者はあまりないと考えられるが、自分の興味関心を伸ばす、文学部的な雰囲気の学部のようなので、生徒の関心を見つつ、適当と思う生徒には勧めてみたい。
(29)【2013年９月】本年度に奈良県立大に２名進学した。いずれの卒業生も私（応接された先生）が担任し送出した。近年は理系志向、特に女子の関心が高まっている。生徒には実利のみを追求するのでなく、大学における教養とか幅広い学修活動にも関心をもつように指導している。県立大学の教育内容・方針には共感するところが少なくないので、これからの展開に期待している。
(30)【2014年10月】「小論文」の模範解答を知りたい。とのご質問があった。この点に関して、採点時には作成するが、配布はできない。採点基準は論旨の一貫性、問題文の理解度、必要かつ制限字数の条件を満たしているかを重視する旨、回答した。

３　推薦入試

(31)【2007年３月、小松原の所感】国公立大学の推薦入試にセンター試験の成績を判定資料に加える大学が多い。本学にあってもいわゆる「Ⅱ」においてセンター試験を課すことはほぼ既定のことと考えられる（※小松原の注記：2008年１月と2009年１月実施の推薦入試はセンター試験の成績と面接の結果を総合して合否を決めた）。その際に、既に他の国立大学でも実施しているように、「調査書」「学校長の推薦書」「センター試験の成績」この３点セットでお願いできないかとのことである。多くの国公立大学の場合、センター試験の成績で合否の７、８割は決まるといわれている。それだけに高校側は先生も生徒もそれに向けてスケジュールを調整し、モードを集中させていく。その段階にあって、「自己推薦書」や「面接」を課すことは、指導

にあたられる先生、そして何よりも受験生にとって負担増につながると考えられる。

(32)【2009年８月】奈県大の推薦入試の募集人数が多すぎる。前期や中期の定員にまわしてほしい。関西の有名私大といわれる大学でも、推薦で取りすぎており、偏差値はあてにならない。私大推薦合格後の在校生の指導が大変である。大学の方からはほとんどケアーはない。私大では推薦入学者と一般入試合格者とでは大きな格差があると聞いている。年内に推薦で合格を決めた学生と、センターと２次試験で合格した学生とでは、学力水準に違いがあるのではないか。

(33)【2012年９月】奈県大の推薦制度は評定平均値の制限がないので、受験指導をやりやすい。

(34)【2012年９月】受験指導はセンター試験を受け、一般入試での受験を指導している。推薦入試は別物で、生徒への受験指導に差障りが生じることも懸念される。

(35)【2014年９月】推薦入試は奈良県内の高校の優先枠があるのかと思っていたが、そうではないということがわかったので、生徒の適性を見極めつつ積極的に受験を勧めたい。ほぼ全員がセンター入試を受験している。奈良県立大学の推薦入試は、結果として、学力検査（国語と英語）中心の合否判定のようなので、その意味からセンター入試の準備指導とも競合せず、安心して推薦受験を勧められる。

(36)【2014年10月】推薦入試は面接での受答えの指導が手間を要する。その意味で、センター受験の指導と重なり教員にとっても、生徒にとっても負担になる。ただし、奈良県大の推薦の筆記試験問題は一般入試の出題形式と同じなので、そのための準備として推薦を受験する意味がある。

４　大学の授業

(37)　【2009年７月】昼間部に移行後、学生に変化が生じたか。夜間部に比べて単位互換で他大学の講義が受けにくくなったことはないか。資格課程がないのにコースを並べても無意味ではないか。奈良にある大学ならではの

学部や学科の設定の計画はないのか。例えば文化財、考古学など。前期、中期の受験生にとって、フィールドワーク（FW）は大学選択の判断材料にはならない。面倒くさがりで文章を書くのが嫌、歩くのが苦手、やってもらうことに慣れているという生徒たちにはFWは、学生指導の道具としての意味はあると思う。学部、学科の教育内容の特長とFWはどう関連するのか。地域総合学科の名前は何を学ぶ学科なのか分かりにくい。

(38)【2009年７月】大学卒業後の進路、進学や就職状況はどうか。将来の職業選択に役立つような科目設定はあるか。２学科それぞれの卒業生の数は。

(39)【2009年８月】授業公開で、大学での学生の皆さんと一緒に授業に参加できたのは、生徒たちにとって貴重な体験だ。

(40)【2009年８月】フィールドワーク（FW）ならどこの大学でもやっている。特に、座学に向かない学生を入れざるをえないところはFWを強調する傾向にあると思う。

(41)【2009年８月】体験実習とインターンシップの違いは何か。

(42)【2010年８月】小学校の国語教育をそのまま上級学年まで引きずっている。文章表現を基盤とした大学の初年次教育は表現方法の教育としても意義がある。学校教育において、中学、高校では記憶力・暗記力偏重の教育が中心であるから、この生徒が身につけたものに加えて、大学では表現力・企画力を身に付ける教育をして欲しい。その意味において、教員の力量にもよるが、基礎ゼミや現場実習はそのような可能性を秘めた大切な科目だと思う。

(43)【2010年８月】奈良という場所の意味を考えた大学づくりを考えてほしい。

(44)【2011年９月】地域創造学部ではどのようなことを学ぶのか。資格課程（教職課程を含む）を設置していない理由。２年次に必修科目のない理由。学科によって就職先は異なるか。実習系、体験系科目の実践内容、就業力育成センターの業務内容を具体的に知りたい。卒業生の大学での学修状況について。

(45)【2011年９月】「ならまほろば学」のような科目は他の先行大学に任せておけばよいのでは。奈良は、学ぶ場所としても、学ぶ対象としても適して

いる。地域創造学部のカリキュラムにおいて、例えば地理学はどのような位置付けにあるのか。

(46)【2011年９月】ゼミでの学習内容を具体的に。自主的な学習活動の内容を知りたい。

(47)【2011年９月】地域創造学部ではどのようなことを学ぶのか。資格課程（教職課程を含む）を設置していない理由は。実習系、体験系科目、専門ゼミでの実践内容は。卒業生の基礎ゼミでの学習の様子は。就業力育成センターの業務内容の説明を。

(48)【2012年９月】大学訪問の可能性、40人一クラスでの訪問が可能であれば、是非、授業参観させていただきたい。少人数教育は大学の特徴としてわかりやすい。

(49)【2012年９月】本校で「こだわり学」を学んだ卒業生を大学でしっかり伸ばして欲しい。奈県大に進学した現大学３年生は「こだわり学」を取入れた教育課程の1期生である。

(50)【2013年９月】地域創造学部は、教員免許を希望しない文学部系志望の学生に勧められると思う。以下に大学に関する質問。就職率や就職先はどのような状況になっているか。大学に社会的ニーズ即応の教育を求めるものではない。地域創造学部における学科目構成はどのようになっているか。奈県大をより知るためにはどのような方法があるのか。少人数は現在どこの大学でもあげているが、奈県大の特徴はどのようなものか。奈良市内、県内の他大学との教育的連携や協力関係はどのようになっているか。大学と地域との関わりはどのような形態をとっているか。

(51)【2013年９月】普通科の高校生は受験勉強が中心になるので、系統的体験的学習をする機会が少ないように思う。奈良県立大学で、コモンズという教師集団が、そこに集う学生たちに対して、初年次から一貫して卒業まで、先生方が話合われながら、チームとして学生たちへの教育実践活動を、教室での座学に止まらず、地域の人々と共に学ぶ姿勢は共感が得られると思う。私（応接して下さった先生）は、国立大学の文学部出身なので、コモンズの教育方法は具体的にイメージできる。複数教員と少人数の学生による研究

室・教室単位での教育活動だと理解している。商学部ルーツの大学でも導入されるようになったのは良いことだと思う。

(52)【2014年10月】奈良にあるのだから試験問題も日本史に特化した出題にしてはどうか。とのご意見を承った。それに関しては、歴史研究に特化した教育課程ではないので、二次試験は多様な受験生に対応可能なように総合問題を出題しているとお答えした。

5　高校訪問の意義

(53)【2009年８月】施設設備で大学教育の質が担保されるのではなく、教員の学生に対する指導力が重要と考えている。実際に大学の現場で教えている先生に学校訪問を受け、話を聞くのはその意味で大切だと思う。

(54)【2010年８月】学校のそれぞれの段階において教師が生徒・学生の心に働きかけるべきことは何かを考えるべきと思う。そのためにもこうして大学の先生が高校訪問されることの意義は大きい。それぞれの学校で教える教員同士による、意見交換の機会として重要だ。というのも、業者主催による模擬授業はその前後で、直接に大学の先生と話す機会が乏しい。この度のような、意見交換は高校と信頼関係の構築にとって重要である。

(55)【2010年８月】学外受験会場は受験校選択には影響しない。バーチャル情報と相対接触情報の相互規定関係がある。①ホームページの充実を望む。大学への情報収集の手段として重要、利用頻度が多い。その上で、②実際に教育にあたられている先生からお話を伺えるとなお良い。先生の高校訪問は、その意味から重要だ。

(56)【2012年９月】10月に入るとセンターの出願手続きが始まり忙しくなる。この時期（９月中旬）であれば若干余裕をもって対応できる。ただ、どの時期であっても大学の先生が来校され直接意見交換できるのは貴重なことと考える。

6　その他

(57)【2008年９月、小松原】各校おおよそ20分位をめどにお話した。部長の

先生は入試のシステムについてはご存知なので、訪問担当教員の大学でのゼミや実習での指導状況を学生の成果物で印刷公表されているものを素材にして話をした。入試については資料を見ていただけばわかるので、必要最小限の説明にとどめ、本学での教育内容が具体的にわかっていただけるよう説明に工夫した。応対して下さる先生によっては、担当教科を通して得た高校生観を話して下さるので、その点も教育情報の共有化という観点から興味深く聞かせていただいた。

(58)【2009年７月】総定員が少人数ということで、貴重な大学である。大学の立地環境が駅（JR、近鉄）から近いということは大変魅力である。父母や生徒へも説明しやすい。

(59)【2012年９月】この高校の特色は教育みらい科を有していることである。教育課程の中に小学校での実習を取り入れている。この機会を利用して、生徒自身が教師としての適性を自分自身で考える機会になっている。その現場に接して、教師への意欲を抱く生徒とその厳しさにたじろぐ生徒にわかれる。最終的に教育系の大学に進学する生徒は50％程である。教育みらい科の学習課程は人と接することや子どもと接する仕事への関心が高まるという効果もある。大学進学に際しても、教職課程のみに関心を払うのでなく、幅広く選択の可能性をもつように指導している（※小松原の注記：奈県大に進学した学生は小学生の校外活動のキャンプリーダーとしてボランティア活躍をしている）。

(60)【2010年８月】学外受験会場は交通アクセスに影響される。自宅最寄駅から乗換なしを好む。京都会場でもできれば関心は高まるかもしれない。

(61)【2010年８月】高校の国際交流、韓国を中心に行っている。７月に韓国から訪問、秋に韓国へ、修学旅行を利用して訪問している。

(62)【2012年９月】奈県大が、大学相談会を設定されたのはユニークな試みであり評価できる。また、時期、期日設定も妥当と思う（※小松原の注記：2012年10月に実施し、オープンキャンパスは後学期には実施しなかった）。

付表　訪問高校一覧

	高校名	設置者	訪問年月
1	大麻	北海道	2007年3月
2	札幌月寒	北海道	2007年3月
3	札幌第一	学校法人	2007年3月
4	北海	学校法人	2007年3月
5	北海学園札幌	学校法人	2007年3月
6	朱雀	京都府	2008年9月
7	嵯峨野	京都府	2008年9月
8	堀川	京都市	2008年9月
9	花園	学校法人	2008年9月
10	夕陽丘	大阪府	2009年7月
11	プール学院	学校法人	2009年7月
12	今宮	大阪府	2009年7月
13	四天王寺	学校法人	2009年7月
14	大谷	学校法人	2009年7月
15	東大津	滋賀県	2010年7月
16	三島	大阪府	2010年7月
17	槻の木	大阪府	2010年7月
18	石山	滋賀県	2010年9月
19	鳥羽	京都府	2011年9月
20	東宇治	京都府	2011年9月
21	近畿大学付属豊岡	学校法人	2011年9月
22	豊岡	兵庫県	2011年9月
23	大阪桐蔭	学校法人	2011年9月
24	寝屋川	大阪府	2011年9月
25	洛西	京都府	2011年9月
26	北稜	京都府	2012年9月
27	城南菱創	京都府	2012年9月
28	塔南	京都市	2012年9月
29	嵯峨野（７に同じ）	京都府	2012年9月
30	高津	大阪府	2012年9月
31	千里	大阪府	2013年9月
32	金蘭千里	学校法人	2013年9月
33	東	大阪市	2013年9月
34	北野	大阪府	2013年9月
35	豊中	大阪府	2013年9月
36	松阪	三重県	2014年9月
37	上野	三重県	2014年10月
38	津東	三重県	2014年10月
39	津西	三重県	2014年10月

※　数字は訪問の順番を示す。